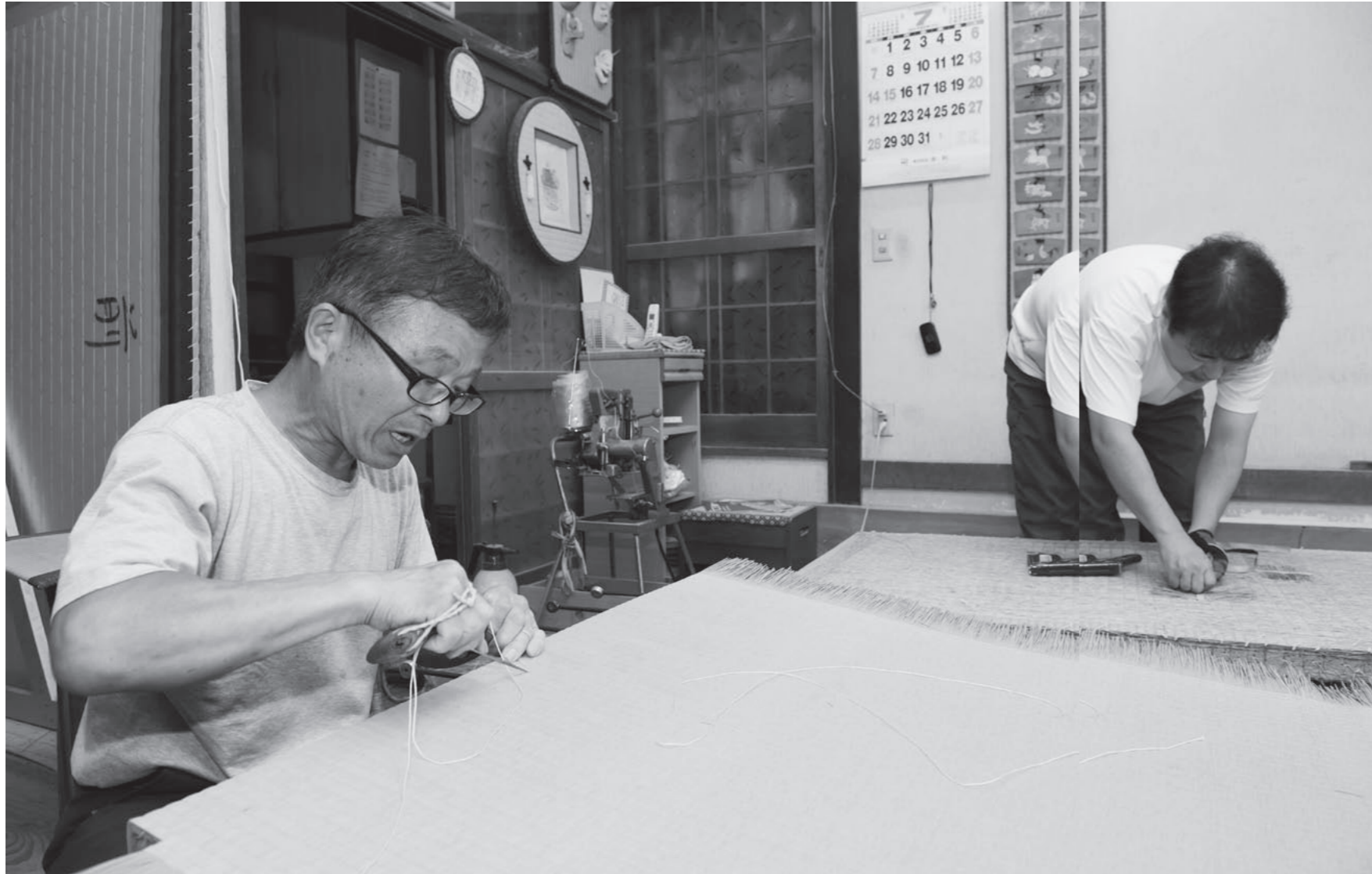


畳職人—金子進 [後編]

「起きて半畳、寝て一畳」——。
人ひとり暮らすのに、畳二畳分の広さがあれば
事足りるといふくらい、
日本人の生活に深く根ざしている畳。
その伝統的な製法にこだわる金子進に、
後進の育成事情と畳職人としての心がけを
語ってもらった。



甥の芳史さんが現在唯一の弟子。まだ一年目だが、自ら道具を握り、作業も分担する。むろん、時には師匠の技を間近で見て学ぶこともある。



鶴岡八幡宮

畳表・畳床の「原産地」

畳工房金子で行われる作業は、「畳表を寸法にしたがって切りそろえ、畳床に縫い付ける」という工程がその多くを占めており、畳表や畳床そのものは他で作られたものを仕入れている。「畳表は、八〇%以上が熊本の八代産です。昔は『備後表』といって、畳表といえば広島や岡山が有名だったんだけど、最近の備後表はごく一部の高級品だけだし、それに代わって熊本産のい草を広島や岡山で織ってるんです」

「畳床については、宮城の『床屋』から取り寄せてます。長年のつきあいだから、丈の長いのか短いのか、あれこれ言わなくてもこっちの欲しいものを作ってくれる」

畳床の原料は稲藁なので、床屋は米どころに多く、収穫の時期になると周囲の農家や新潟・岩手などから藁を大量に買い付けて畳床を作る。「見に行ったことがありますけど、あの厚さにするのにもすごい量の藁を使うんです。間に細かく切った藁を入れながら互いに編んでいって機械で圧縮するんですけど、藁の量が少ないと芯がふにゃふになっちゃう」

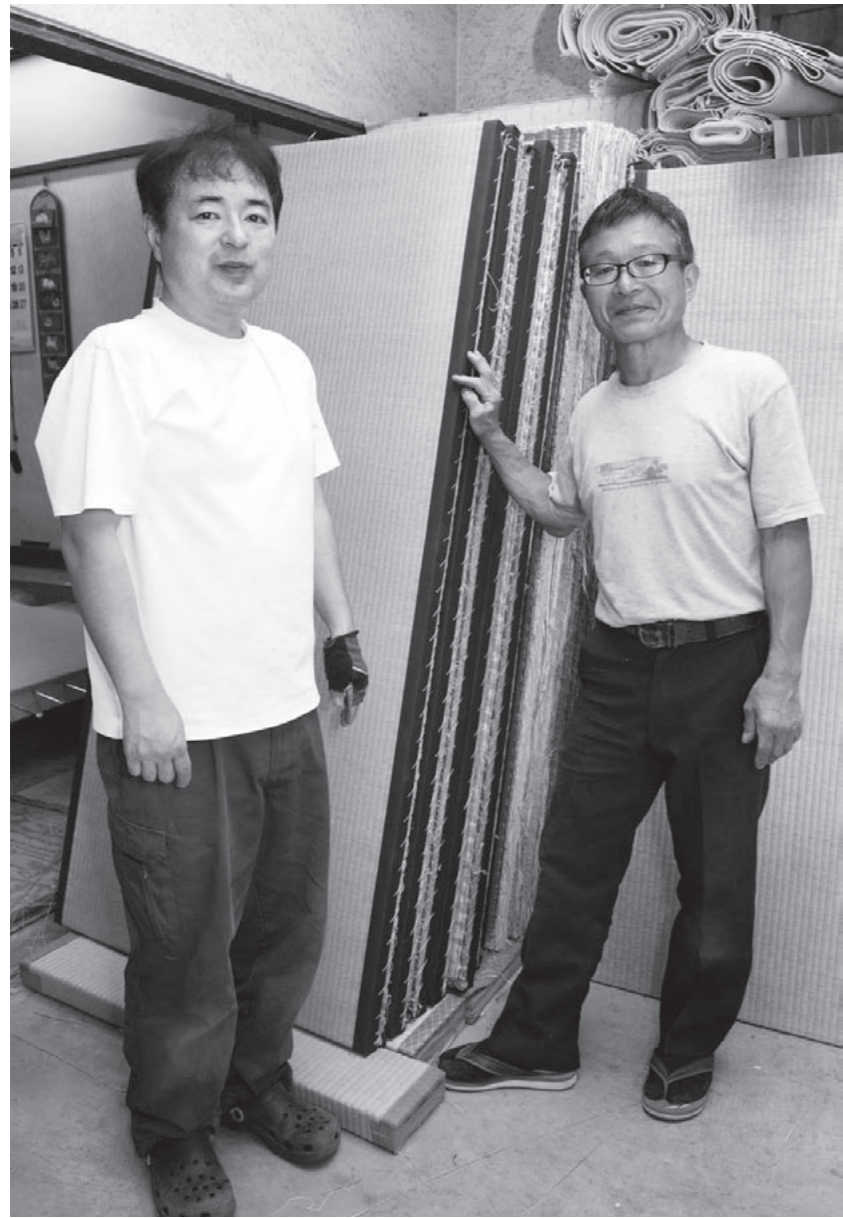
「今はポリスチレンの芯材なんかもあって、マンションや建売住宅の畳は安さ重視でどうしてもそっちの方が多くなるけど、やっぱり全部藁で作った畳床は踏み心地が全然違いますよ」

神社や寺の畳に使われる「紋縁」

鎌倉に工房を構える畳工房金子では、神社の畳も数多く作ってきた。普通の畳と大きく異なるのは、一般的には黒の無地になっている縁の部分に模様がある点だ。

「作り方はお寺用も住宅も基本的に同じです。お寺や神社の方が少しいい材料を使うくらい。違うのは縁で、『紋縁』を使うからやり方が少し違います。畳を敷いて合わせた時に、隣の畳の紋ときれいに合っていないとおかしくなっちゃうので」

紋縁の図柄にもさまざまな種類があり、神社では「祝詞を上げる部屋」「お祓いを受ける部



かねこ・すすむ ●1948 (昭和23) 年、神奈川県鎌倉市生まれ。父が開業した鎌倉の畳店を兄とともに継ぎ、半世紀にわたって住宅・神社・寺院・旅館などの畳作りに携わってきた。機械を使わない伝統的な製法を守り続けている。1級畳製作技能士。

「見えない部分に手間をかけて、畳をしつかり長くもたせる。それが畳職人の仕事」

うした部分のメンテナンスも、畳表を張り替える際の大事な工程の一つだ。
い草を分量でつまみとり、畳床のすり減った部分に縫い付けて高さを調整する。もちろん、その上から畳表をかぶせてしまえば、どこをどのくらい補修したのか外観からはわからない。「お客さんは、見える部分がきれいになって、畳が元の場所に納まれば喜んでくれます。でも

見えない部分をちゃんとして、長年使い続けても同じ状態を保てる、やっぱり他とは違うと言われるのが畳屋本来の仕事。親父にも「見えないところが仕事だ」ってよく言われましたよ」
目につくところがきれいに仕上がっているのは、ある意味当たり前。人目に触れない部分に手を抜かないことこそ、畳職人の本分。金子の眼はそう物語っていた。



手鉤、包丁、畳針などの道具



右/寺社の畳に用いられる「紋縁」。左が「白大紋」、右が「九条紋」。他にも様々な模様がある。
左/傷んだ畳床をい草で修繕する。「い草をどれくらい足せばいいかは、50年間培った感覚でしかわからない」

屋」など部屋の用途によってどの模様をどこに使うか決まっているという。

「お寺の場合はほとんどが無地なんですけど、お仏壇の前の畳には紋縁を使います。こればかりは納めた時に柄がズレてたら見つともないから、かなり気を使う部分ですね。普通の家庭と違って大勢の人目に触れることになると思えば、よけいに失敗できない」

寺によってはオリジナルの紋を用いるところもあり、その場合は紋縁を特注することになる。「寺や神社なんかには畳を入れて、うまく紋が合わさるかどうかが、その瞬間が面白い。畳のあっち側とこっち側では貼り方が違うから、きっちり寸法測ってやっても納めてみないとわからない部分がある。畳がきちんと納まって、紋もぴったり合った時の『うまいいったな』っていう感じはやめられないですね」

「見て覚える」そんな時代じゃない

現在、金子の傍らで仕事を手伝う芳史は、金子の兄・芳幸の息子、つまり甥にあたる。一年前はサラリーマンで、畳作りは全くの未経験だった。

「この一年で針は通せるようになってきたけど、まだまだ百発百中で自分の思い通りになっていくわけにはいきらないです」

金子も修業時代を思い返すように続けた。

「上から刺すのは何とかなるんです。下から上に通すのが難しく、針がどこから出てくるのかわからない。『柔らかい藁を針で刺すだけなのに、何でできないんだ』って、私も親父に怒られましたけど(笑)」

職人の世界では、いきなり弟子に仕事をさせたりせずに、まずはとにかく親方の仕事ぶりを観察させることから始める。という不文律がありがちだが、金子の方針は正反対だ。

「見て覚える」なんていうのは昔の考え方ですよ。今はそういう時代じゃない。実際、何十年もやってくるような人の技をただ見てたつてわからないし、面白くもない。自分でやってみて失敗するから身につくんです。彼の場合は始めたのが遅かったから、なおさら早く教えなきゃいけない。長いこと続けてきて、おかげさまでいいところのお客さんもいるの。ここで終わるのももったいない話。そう思ったなら『じつと見てる』なんて言ってもらえないですよ」

父の教え「見えないところが仕事」

藁を編んで作られている畳床は、長く使えば表面が剥離するなどしてすり減ってくる。初めはわずかなほころびでも、放置すれば少し踏んだだけでわかるほどひどく劣化してしまう。こ